

社会福祉施設での継続的な実習を通してソーシャルワークを学ぶ

—大学初年次学生が体験した印象的な実習場面より—

○ 東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

キーワード：社会福祉施設実習(体験)、ソーシャルワーク教育、スーパービジョン

1. 研究目的

現在、社会福祉専門職の実践能力が高く求められ、教育現場と実践現場との連携を強めたソーシャルワーク教育が重要と言われている。社会福祉専門職を目指す学生の講義・演習・実習の各教育過程や場면을早い段階からソーシャルワークの学びに結び付けていくことは、学生の学習意欲や専門職意識を高めていくことにつながるだろう。

大学入学時の学生は「実践力やコミュニケーション能力を身に付けたい」「人と人との関わりを理解したい」などの目標を持ち、早くから社会福祉施設での実習(体験)に期待を寄せている。本学では継続的に実習(体験)を積み重ねられる教育環境を整えており、大学初年次の早い段階からソーシャルワークの学びに結びつけていくことが可能だと考えてきた。社会福祉施設では、大学初年次の実習(体験)であることから、職員や利用者との直接的な関わりを通して人間関係を構築すること、実際の生活環境に触れることが主な実習(体験)内容として理解されている。

今回は、年間を通して継続的に実習(体験)をおこなった学生間で印象的な場面や出来事を挙げ、どのような気づきや学びを得たのか話し合う時間を設定した。そして、学生間で整理した気づきや学びのカテゴリーをもとに、大学初年次におけるソーシャルワークの学びを考察することを目的とする。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

この継続的な社会福祉施設実習(体験)は利用者の「生活」を意識することができる。したがって、学生が環境と利用者の生活が変化していく過程を見ることができると予測した。また、専門的な知識や技術を習得していない時期から実習(体験)をおこなうことは、学生がどのような視点から社会福祉施設で気づきや学びを積み重ねているのか明らかにすることができると考えた。学生間で整理した気づきや学びのカテゴリーから、ソーシャルワーク教育に結び付けることができるのではないかと、これが今回の研究の視点である。

2) 研究の方法

2012年6月1日から2013年3月31日までの10ヶ月間(実質;245時間以上)、同じ社会福祉施設で継続的に実習(体験)をおこなった大学初年次の学生41名を対象とした。

学生間で実習施設の垣根を越えた少人数グループを編成し、実習での印象的な場面や出

来事を話し合い、気づきや学びを整理した(2013年4月17日実施)。学生から抽出されたカテゴリーをもとに、報告者が4つの視点を定めて分析した。

3. 倫理的配慮

本研究における学生の発言は、個人の成績に影響が及ばないことを事前に伝えた。そして、個人や実習施設が特定されないよう統計的に処理をおこない分析することを配慮している。

4. 研究結果 (印象的な出来事や場面からの気づきや学び)

学生から抽出されたカテゴリーを下図の4つの視点でまとめた。 n=565

[職員] 17.7%	[利用者] 40.5%
<ul style="list-style-type: none"> ・職員同士が連携すること (細かな支援の確認や共有があった など) (仕事内容の多さを知った など) ・職員と利用者に関わること (状況に応じて対応を工夫していた など) ・職員からいただいた助言内容のこと (挨拶や利用者を理解するための支援方法 など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・利用者からの声や言葉を掛けられたこと (利用者が昔の話しをしてくれた など) ・利用者の表情の変化が見られたこと (家族との時間は表情が明るくなった など) ・利用者の言動が変化したこと (ユニット内を落ち着かず歩き回っていた など) (実習生との関わりを拒まなくなった など)
[実習生] 23.7%	[環境・サービス] 18.1%
<ul style="list-style-type: none"> ・実習に迷いを感じたこと (何もできない自分がいた など) ・実習に喜びや達成を感じたこと (計画した余暇実践が成功して楽しかった など) ・自分の成長(変化)を感じたこと (利用者の思いを理解できるようになった など) 	<ul style="list-style-type: none"> ・環境が影響すること (ユニット移動による利用者の体調変化 など) (職員と利用者の関係が生活に変化を及ぼす など) (地域の方が余暇活動の雰囲気をよくした など) ・支援サービスのこと (個別に支援や時間が考えられている など)

5. 考察

学生は結果のように継続的な実習(体験)であるからこそ、大学初年次の学生であっても「生活」を捉えることができた。そして、印象的な場面や出来事の一つひとつから「生活モデル」の枠組みと関連づける学びができています。しかし、早い段階から学生の実習(体験)ばかりに重点をおくことは、自己の無力感や有用感に左右され、学習意欲の低下やソーシャルワーク理論に結び付かない経験値を確立させてしまう恐れもある。教育現場に課せられる役割は大きく、実践現場との連携により、実習(体験)と並行したソーシャルワーク理論に結び付けた定期的なスーパービジョンを進めることが必要である。